

平成26年度南丹美術工芸パートナーズスクール事業



京丹波町立瑞穂小学校

京都伝統工芸大学校

高校や大学等と連携し、児童がより専門的な指導を受けて作品を制作することを通して美術・工芸への興味・関心を高め、南丹地域の美術工芸教育を推進するため、南丹美術工芸パートナーズスクール事業を開催しています。

今回は、9月9日(火)・24日(水)の2日間に、京都伝統工芸大学校副校長の工藤良健教授と6人の学生の皆さんが京丹波町立瑞穂小学校5年生23名の子どもたちに、陶芸を教えてくださいました。



最初に、「陶器って知っているかな。」と工藤先生が尋ねられ、お茶碗や湯飲み、洗面台、トイレの便器、電柱のがいしなどにも陶器が使われていることを教えてもらいました。子どもたちは身近な生活の中に陶器がたくさんあることを改めて知りました。

ろくろの実演ではあっという間にきれいな円の底ができ、ひも状の粘土を積み上げていくと、湯飲みの形ができ上がり、子どもたちはあまりの手際良さに驚くばかりでした。さらに、飲み口を広げていくとお茶碗に、もっと広げていくとお皿にと、一つの粘土が次々に形を変えていく様子はまるで手品のような様子でした。「ぼくもやってみたい。」と子どもたちは意欲満々の様子でした。陶器の形づくりでは、ろくろ、弓、印花など、専門的な道具を自由に使い、大変貴重な体験ができました。



2日目は、素焼きされた自分の陶器に模様つけをしました。色をつけるだけでなく、粘土を少し彫ると違った雰囲気になることを教えてもらい、焼き上がりの色や模様を想像しながら熱心に取り組みました。子どもたちは、おじいちゃんの徳利とお猪口、おばあちゃんの湯飲み、家族のお皿などを作っていました。中には、地域で登下校の見守りをしてくださっている方へマグカップを作っている子どももいました。



工藤先生は「人のために何かをして喜んでもらえる体験が大切です。家族のために作品を作って喜んでもらえるようにしたい。」と話されていました。また、学生の皆さんからは「子どもの自由な発想に驚いた。作る楽しさを再発見できた。」「教えるということ自分で帰ってくるものがあり、いい体験になった。」という感想が出ていました。

今回の陶芸体験を通して、子どもたちにも学生の皆さんにも新しい気づきが生まれ、楽しく充実したパートナーズスクール事業になりました。

